
永遠花火

雪@urea_urea

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠花火

【Nコード】

N1699Q

【作者名】

雪@urea|urea

【あらすじ】

とある障害を患った主人公と、その医師の交流の物語。

(前書き)

謝謝P様の初音ミクオリジナル曲／永遠花火（sm8032825）
をモチーフとした短編小説でございます。

それは昔々、私がまだ九九も暗唱出来なかったような年齢の頃。
まだ障害に苛まれていなかった時のこと。

何度かねだっていると、重い腰をあげてようやく母はもういない
父の話をしてくれた。

まるで寝る前にお伽噺を聞かせるような優しい口調で、両親の馴
れ初めから結婚に至るまでの物語を事細かに話す母の声に、私は耳
を傾ける。それはどんな絵本よりも私を興奮させ、虜にしたのだっ
た。

母は、その劇中で「私はあの人に一目惚れしたのよ」と歳不相応
に頬を赤くして、まるで若返ったかのように光悦とした双眸を傾け
た。そう言った母を見て、幼心に私も一目惚れというやつに憧れる
ことは道理だったのかもしれない。

だが、次の日に父の遺影の前で静かに涙を流す母を目撃し、私は
もう二度と父の話題を振らないようにしよう、と決意するのだった。
——と、そこで目覚める。眠気から徐々に遠ざかる頭を以て、私
は自らの過去を夢に見ていたことを実感した。何故だか夢は、私な
んかにも確かな映像としての媒体で私の脳裏に浮かぶのだから人間
の身体は不思議だ。

灼熱とも比喻できそうな暑さが猛威を振るうこの季節の朝の気温
に目を細めつつ、額にうっすらと浮かんだ汗を拭い布団から這い出
る。この夏にも楽しみどころは沢山あるのかも知れないが、私から
してみれば残念ながら欠点しか見当たらないような季節だ。この近
隣で今日から二日をかけて行われる花火大会なんかは私にはまるで
無関係だし、今のよう寝起きの暑さも許し難い。まあ、極めて言
えば、桜も紅葉も雪も、私にとってはまるで関係のない出来事だか
ら、一概に夏だけを責めるわけではないが。

やっぱり、楽しい筈のものがそうでないというのは、何処か寂し

い気もする。

だが、そんなセンチメンタルを吹き飛ばしてしまう位に今日は嬉しい日なのだ、と唐突に思い出した。

毎週土曜日。病院に診察へと行く、週に一回しか訪れない曜日である。

母に手を引かれ、私は掛かりつけの病院へと足を運んだ。予約の甲斐があつて、私の順番はすぐにやってくる。

名前を呼ばれ診察室へのカーテンをくぐると、病院独特の薬品の匂いがつんと鼻腔をくすぐった。その隙間に、嗅ぎなれたシャンプーの良い香りを感じ取ると、看護師さんに手を引かれてその芳香の発信源へと向かう。

少しすると手がほどかれ、私は患者用の椅子に座らされる。医者に向かい合う仕様になっているあれだ。

「毎週お疲れ様」

その椅子に腰を落ち着かせていると、前から聞きなれた医者と言葉が聞こえる。この声を聞くと、何故だか私は安心するのだ。

いつも通りの診察を終えると彼はまた、お疲れ様と私に労いの言葉をかける。だから私は、

「そちらこそ、お勤めご苦労様」と定型句を返すのだった。

このやり取りは、彼が二年前にこの病院に転勤して来て以来、欠かさずに行っているやり取りである。小さい病院だからか、毎週私が決まった時間に診察に来るからなのかは定かではないが、私がここに来ると決まって診察室には彼がいるのだ。

必然、障害が原因であり他人との交流を深められない私でも、彼とは仲が良くなった。私と年齢も近い若い医者であることも、その要因の一つだろう。

ありがとうございます、と口にして、看護師さんの助けを借りて椅子を立つ。

彼と過ごせる短い時間が少々名残惜しいが、我が儘を言っても仕方がない、家に帰ろう。また来週を楽しみにしておけばいい。

だが、どうやら今日はその決まったやり取りに少しおまけが付いているらしく、彼の言葉を耳が受け取り始めた。

「来週からこのやり取りもなくなるんだと思うと、少し寂しくなりますね」

矢先、私の背中にそんな声がぶつけられる。

唐突な独白に動揺し、思わず足を滑らせた。だが間一髪、私の手を取ってくれていた看護師さんが抱きとめてくれて何とか転倒は免れるも、それに安堵している余裕は微塵とない。

不安定な足に無理矢理言う事を聞かせ、何とかその場にとどまると、唇を開いた。

「……どういう事、ですか？」

自分でも震えていると分かる声。落ちつけ、と自分に言い聞かせようとしても身体は言う事を聞かない。だが、そんな私の動揺はいざ知らず彼はいつもと変わらない口調で、

「ああ、すいません。言っていませんでしたね」

と告げ、息継ぎもせずに言葉を連ねた。

「僕、来週で転勤するんですよ。ここに来た二年間、ずっと診てきた貴女を他の人に任せるのは心残りですがね」

何でもないようなその言葉に、頭が揺さぶられる。何故こんなにも呼吸がし辛いのか、自分だって分からない。

真っ黒な視界の中で、手さぐりに言葉を探すが何も見つからない。こんな時に目が見えない事はとてもどかしい。何せ、自分が泣いているかどうかすら不安定なのだから。

「あ、これ、何かあった時は連絡して下さい。貴女はとてもよくして頂いた患者さんですからね。二年間、本当にありがとうございます」

と、私の手にそっと何か薄いものを握らせたことにも、まるで実感が湧かなかった。

別れの一言も告げる気力がなく、無言で診察室を後にする。待合室に出ると、そこで待っていた母に看護師さんが私の手をバトンタッチして、病院から出た。

母の、顔色が悪いという心配そうな声にも反応を示せない。自覚できる程虚ろな足取りで、私は帰宅した。

玄関をくぐり、部屋の空気を目一杯吸ってようやく会話が出来る程度のモチベーションを取り戻すと、改めて母に向かう。

しかし、不安そうな母の声に私は、

「うーあ、あああっ……」

嗚咽混じりの台詞しか返せない。伝えなきゃいけないことがあるのに、それすらも出来ない自分が馬鹿みたいにもどかしかった。

それでも喉は悲哀を訴えるのみで、一向に私の声を発する気配はない。

母は、理由も知らずに、ただ私が泣きやむまで抱きしめてくれていた。

嗚咽が止まり、正常に呼吸が出来るようになって、やっと私は母に伝えた。二年も私にかかり切ってくれた彼が転勤すること、そして、自分の正直な気持ちを。

ただ、離れたくはない。駄目だと分かっているでもそう考えてしまう、自分の正直な気持ちを。

話す度に胸は苦しさを増した。決別が現実味を帯び始め、私の心臓の少し右を握りつぶさんと暴れだす。それでも、ただ必死に言葉を紡ぐしか、私にはできなかった。

私と彼は患者と医者との関係。それ以外の何物でもない事は、私が一番分かっている。

自分の全てを絞り切ると、また涙が溢れる。少しの沈黙が落とされた後、追い打ちをかけるように母は冷たい声で、

「自分のこと、貴女はちゃんと分かっている？ 彼は優しい人なんでしょう。なら、貴女が、気持ちを伝えなんてすれば、彼は責任感から確かに貴女の元を離れないでしょうね。でも——それは、貴女

と過ごす事は、本当に彼の幸せなのかしら？」

言い切ると途端、泣いた私を置いて母は奥の台所へと下がる。一人になる事が辛くて、涙は加速度的に量を増やした。

母の言い分は尤もだ。私の想いなんてものは、ぶつけられる本人からしてみれば酷く鬱陶しいが逃れられない、例えるならば税金のようなものであることは自覚している。それは、平等に周りを不幸にするという事も。

———されど。

容易く忘れられるのならば、こんな風に泣いたりなんてしないのだ、と言い聞かせる自分も確かにいて。

泣きじゃくる声に交じり、遠く花火の上がる音が聞こえる。そういえば今日は花火大会だったな、なんて思い出してから、私は一つの提案を己にした。

次の日のことである。

昨日彼が渡したものは名刺だったそうだ。タイミングよく、それには電話番号が印刷されてあったらしい。

母に懇願し、電話をかけてもらう。三つのコールが重ねられた後、はい、いつもの私を安心させる声が受話器越しに聞こえた。

「私です。……あの、今晚お暇であれば、その、宜しかったら、転勤のお祝いも含め、花火大会、一緒にしていただけませんか」

緊張のせいか途切れ途切れな、上ずった声が響く。少し何かを考えるように彼は黙った後、

「でも、貴女は、花火……」

予想していた問いかけ。ならば、既に答えも用意しているというもの。

「大丈夫です！」

ここは弱気になってはいけない。身体中の勇気を振り絞り、電話を声で破壊せんとばかりに叫ぶ。

私らしからぬ大声に彼は驚いたのか少し黙った後、明るい声で、

「貴女がよろしいのならば、是非」

「あ——ありがとうございます！」

その後、待ち合わせの場所や時間を決定し、別れの挨拶を告げた。想いを告げるわけじゃない。ただ、最後に思い出を作りたいと、それだけ。

もどかしい本心を抑え込み、身に纏う浴衣を母と選び始めた。

彼に手を引かれ、花火大会へ。大丈夫ですか、足元気をつけてくださいね、と気を使ってくれる彼の優しさが本当に大切に思える。だけど、そう思えば思うほどに別れが辛くなってしまふから私は、しつこいなあ、大丈夫よ、そう嘯いて見つからないように吐息した。そしてようやく花火大会の会場へ。彼が二人分のスペースをとってくれて、そこに座らされる。

私はその轟音にただただ驚くばかりだったが、隣の彼は子供みたいに興奮してたまやー、なんて叫んでいた。幼いところもあるんだな、と彼の違う一面を垣間見た気がする。

ばん、ばん、と規則的に破裂音が空に響くと共に、隣にいる私を忘れたように彼の声も共鳴する。花火なんかよりそれを聞いている方が、私はよっぽど幸せを感じられた。

だけど。近くに寄れば寄るほど、この後が辛いなんてことは、もしかしたら分かっていたのかもしれない。

次が最後の花火です、と拡声器越しに告げられて一際大きな音が空を揺るがす。すると呆気なく、花火大会は終わりを迎えた。

「あ、終わりましたね。すごく楽しかったです。……と、ごめんなさい、何だか一人で楽しんじゃって」

正気に戻ったような声が隣に聞こえたので、首を横に振って大丈夫だよ、と示す。そして、握った手を引っ張り、有難うという意思を伝えた。

分かりました、と声が漏れて彼は立ちあがる。ゆっくりと、私達は家路に着いた。

途中、打ち上げ花火のセットが欲しいと言い、彼は駅の前に設置されたコンビニに立ち寄った。どうやら先程の花火で童心に帰ったらしい。

影響されやすい人だ、と呆れ混じりに溜め息をつく。

そうしてコンビニを後にした途端、道路に足を踏み出すと同時に顔に雨の滴がかかった。

もう一回店内に入って傘を買おうか、なんて言う彼の声も耳に入らずに、私は空に向けて手を伸ばす。

不思議だ。雨音なんて聞きなれている筈なのに、何故だか違和感を覚える。

———嗚呼、雨だ。見えている。これは、雨だ。

そう確認すると同時、何故だか分からないが、伝えたいと思ってしまったのである。

決して、思ってはならないのに。決して、考えてはならないのに。ただ、その一言を口にしたいと、思ってしまったのである。

どうして、彼の隣ならばこの空の色が分かるのだろう。

「傘、買いました」

私の手を引いている気がした。だが、私は無反応を返答とする。

舌の上に微かな塩の味が広がった。

涙は、きつと雨に紛れて気付かれないはず。

だから、今なら言えるかもしれない。泣いていることを悟られずに、出来るかもしれない。

だが、言ってはならないと、言ってしまうえば彼を台無しにしてしまふと語る自分もいる。

ああ、せっかく着てきた浴衣が濡れちゃうな。私は分からないけれど、母が言うには似合ってるらしかったから、少しくらいは褒めて欲しかったのにな。

まあ、そんなところも貴方らしいと言えば、そうなのかもしれない

いが。

ふと見計らったように、目の前の駅から放送が聞こえた。一番線、列車が通過致します、白線の内側まで――

「……あのっ」

――ああ、これだ。このタイミングだ。

コンビニの中へと入ろうとする彼を、強くなってきた雨音に負けないように呼びかける。すると手を引っ張る力が弱まって、次の言葉を待つように彼はその場で静止した。

雨は私を切り裂くように打ち付ける。髪に滴って、私を身体の内まで冷やす。

先程の放送に変わらず、列車がこちらに向けて近づいてくる音がする。ガタンゴトン、ガタンゴトン。

「どうしたんですか？」

彼が急かすように言葉を紡ぐ。もう少し、もう少し。

雨でぐしょぐしょの私の顔は、最早どれが涙なのか分かりはしないくらいだろう。服の内側まで湿り始め、興奮していた気持ちが冷やされた。大丈夫、今なら言える。

列車が線路と擦れる、けたたましい音が鼓膜を侵す。誰かが整えた舞台みたいだ。さあ、徐々にその音は大きくなって。

「……え、っと」

ここで、私自身にけりをつける。もう、引きずらない。

ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン――

「――――好きです」

――ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガタンゴトン、私の小さな叫びは、虚しく無機質なその音にかき消された。

「どうしましたか？」

「あっちでも、お仕事頑張ってください」

だが、これでいい。貴方には、聞こえなくていいんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1699q/>

永遠花火

2011年8月3日03時21分発行